

はじめまして。旧大條家茶室修復の会の発起人として参加させていただくことになりました三浦寛也と申します。私は、現在アメリカの大学で教鞭を執っておりますが、父の実家が茶室から歩いて数分の坂元にあり、20 数年前両親も仙台から坂元へ戻り、現在も生活しております。また大徳寺は三浦家の菩提寺として代々お世話いただいており、私も山元町に毎年里帰りするたびに、お墓参りと茶室を訪れるというのが習慣になっています。

震災後3年ほど前から、茶室の傷みがひどくなっていることに気づき声を上げなければと思い、ブログで紹介したり、友人に話をもちかけたりしてはいたのですが、なかなか具体的な行動が起こせず、遠くから歯がゆい思いをしていたところに、清水すみ様からこのお話を頂き、今度こそ、という期待に胸を膨らませております。そこで、今回17日にみなさまに直接お目にかかることができず非常に残念なのですが、メールにて、私がなかば荒唐無稽に思い描いている茶室修復後の活用への夢とアイデアを、お送りしたいと思います。

地方再生という言葉が飛び交うようになったのは、バブル絶頂期にあった竹下政権のふるさと創成事業からでしょうか。しかし、いま考えてみると「地方」再生という言葉は、紛れもなく東京という中心から見た、いわば辺境的な「地方」というニュアンスも否めません。それから20年以上の歳月が流れ、震災が起こり、山元町のような被災地にとって地方再生ならぬ地域再生という言葉は、今まさに切実なものとなりました。

日本語の、「くに」という概念は、そもそも「近代国家」とは異なるように思えます。その昔、「くに」といえば、旧藩を指し、旧藩ほどのサイズが日本人にとって想像しやすい「くに=共同体」なのかもしれません。旧藩は、現在の自治体とはサイズもシステムも違いますが、仙台「藩」の仙台城にあった唯一の遺構である、この山元町の茶室を修復して活用するということは、まさに「くに」としての地域再生にふさわしい事業のように思えます。

しかし、いまだに仮設住宅で生活されている方々のことを考えると、文化施設の修復という作業は、優先順位の最下位に位置するような、非常識な案件のように思われるかもしれません。その一方で、人口減少が震災前から続いている町の状況を考えると、コミュニティの中心となる拠点から、交流人口を増やすきっかけを作り出していくことも、想像の射程に入れる必要があると思います。

この山元町の茶室について、キリギス出身のアーティストの友人と話す機会があり、修復された後の茶室の活用方法にも話が及びました。彼女の出身地であるキリギスでは、シルクロード沿いにチャイハナと呼ばれるティーハウスが昔からあって、中央アジアをキャラバンが行き来していた時代、商人たちはそこで荷を下ろし、商いをしながら、遠い地で見た珍しい動物や、異国に住むエキゾチックな人々の話に花を咲かせたりしていました。それを聞く地元の人々は、寝転んだり頬杖をついたりして、パイプをくゆらせながら、詩人の語る叙事詩や音楽に耳を傾けたり、宗教や政治について、意見をたたかわせたりしていました。いってみれば、チャイハナは、コンサートホールであり、公民館であり、市場でもあったわけです。茶を飲むという行為は、茶を飲むという行為それ以上のものである、ということは利休の茶の湯がしめしてくれているわけですが、日本以外の文化圏の中でも茶を飲むという行為から、情報の伝達と物流が起こり、そこからコミュニティが発生していった事実は見逃せません。

たとえば、町の人たちが憩える場としての茶室、またはそれに併設したカフェや地元の特産品を売るコーナーを設ける一方で、茶を飲むという行為、または茶の湯というテーマをもとに、世界のアーティストに作品のアイデアを募り、優れたアイデアを出したアーティストを招聘し、アーティストレジデンスとして機能させていくことはできないでしょうか？

アーティストレジデンスというシステムは、その言葉通りアーティストが地元でコミュニティで生活をし、地域住民との交流を図りながら、アートを作る場のことであり、作る人、地域で支える人、そして作品を見に訪れる人々と、交流が生まれる地域振興の装置として世界中でいろいろな試みが行われています。私自身も、スペイン・アンダルシアの人口3000人ほどの小さな村にあるレジデンスや、マレーシア東部の民家を使ったプログラム、またはアルゼンチンのブエノスアイレスの個人のギャラリーが主催しているレジデンスなどで創作をさせて頂く機会があり、よそ者のアーティストとして、数週間からふた月ほど、それぞれの場所に滞在しながら、さまざまな地域とアートの共生の方法を実体験することができました。

茶の湯文化は、茶を一服するという日常の行為を洗練させることによって芸道へと昇華した経緯があり、茶室がサロンのような役割をはたしながら、立花や茶の湯、日本の水墨画という、東山文化を形成していきました。アーティスト＝芸道者が生活に密着し、生活そのものの見方を変えるという意図に置いて、21世紀のアーティストレジデンスとつながる部分が大いにあるような気がします。また、千利休自刃のあと、秀吉の茶頭となった古田織部は、キリスト教を通じて流入した外国文化を茶の湯に大胆に取り入れ、和漢、そして西洋のルーツを織り交ぜた、きわめて日本的な編集力を生かした文化の礎をつくったともいえます。ここで茶の湯は国境を越えた文化の受け皿としても機能したわけです。

そう考えると、この山元町が持つ茶室は、山元町という「くに」から世界に発信できる装置になる得るのではないのでしょうか？

私自身はアメリカのメイン州にこに住み、ベイツ大学というリベラル・アーツカレッジで作曲を教えておりますが、2005年からコロンビア大学の中世日本研究所で、雅楽と邦楽のプログラムを中心とした日本文化によって国際交流を深め、後生に伝えていく活動もさせて頂いております。過去に中世日本研究所は、ユネスコのワールドモニュメントファンドなどから助成をいただき、京都の尼僧寺院の修復に関わってきた経緯もあり、こちらのネットワークを使ったお手伝いができるのではないかと思います。

三浦 寛也 拝